—グラビアー—

皮下腫瘍の臨床診断における超音波の有用性

東 直行¹ 林 綾子² 佐藤 寛之²¹日本医科大学多摩永山病院皮膚科²日本医科大学多摩永山病院中央検査室

Efficiency of Ultrasound for the Clinical Diagnosis of the Subcutaneous Tumor

Naoyuki Higashi¹, Ayako Hayashi² and Hiroyuki Sato²¹Department of Dermatology, Nippon Medical School Tama Nagayama Hospital²Division of Laboratory Medicine, Nippon Medical School Tama Nagayama Hospital

図 1

超音波（エコー）検査は、近年皮膚科領域でも皮下腫瘍の診断で使用されている。当科では、中央検査室の協力を得て、1,282例（2006年1月～2010年12月）に実施し、手術症例（499例（39%））では病理組織検査と皮膚エコーの結果を照合し、その診断精度を上げる取り組みを行っている。皮膚エコーの利点は、1、非侵襲的で、簡便、ほかの画像診断に比べ安価。2、典型例では診断が容易。欠点は、1、被髪頭部は実施しにくい。2、特徴的所見に乏しい

図 1 GE ヘルスケア・ジャパン社の超音波診断機 LOGIQ 7 を使用し、14 MHz のプローブを用いている。

図 2 a：粉瘤：炎症のない典型例では嚢腫構造と側方の著明な低エコー、底部後方の高エコー。b：石灰化上皮腫：石灰成分の沈着程度で変わるが、薄い高エコーより後方で

場合は除外診断的になることがある。と考える。皮膚エコーは、欠点に記載した症例や腫瘍サイズが大きい症例では、MRI、CT といったほかの画像診断と組み合わせることで、術前に、より臨床診断を絞り込み、有用な情報を提供してくれる診断機器であるといえる。図 2 に典型的な皮下腫瘍の皮膚エコー所見を供覧した。これら以外に、異物、脂肪腫、血管平滑筋腫、皮膚線維腫、血管腫、血栓、皮膚幼虫移行症の虫体などにも皮膚エコーが有用である。

は著明な低エコーを示す。c：反応性リンパ節腫脹：周囲より低エコーの楕円領域、内部の中央に線状のやや高エコー（リンパ節門）が見られる。d：ガングリオン：嚢腫構造があり著明な低エコーで、場合によっては関節との連続性も確認できることがある。e、f：悪性腫瘍（類上皮肉

連絡先：東 直行 〒206-8512 東京都多摩市永山 1-7-1 日本医科大学多摩永山病院皮膚科

E-mail: ton@nms.ac.jp

Journal Website (<http://www.nms.ac.jp/jmanms/>)

図 2

腫) : **e** では粉瘤のエコー所見に見えるが, **f** のドップラーにて, 内部の血流が豊富であり悪性が疑われ, 生検により診断された (粉瘤では内部は角化物のため血流はみられな

い). **g** : 毛巣洞 : 真皮内の低エコー領域内に線状の高エコー (毛髪) が認められる. **h** : 副乳 : 真皮内に入り組んだ低エコーの網状の領域 (乳腺組織) を認める.